

新ラーニング・コモンズの利点と課題： 学習スタイルと自律学習の観点から

加藤 滯
千代間 泉
若本 夏美

Abstract

This study explores how the Learning Commons (LC) of Imadegawa Campus at Doshisha Women's College of Liberal Arts has been recognized and utilized by its college students, and discusses its advantages and potential drawbacks. Learning facilities such as the LC are expected to promote self-regulated learning outside the classroom, whose importance has been advocated in not only the field of learning foreign languages but also other fields such as Japanese studies or life sciences. In relation to self-regulated learning, this study intends to examine the relationship between college students' learner styles and their choice of learning at the LC. In particular, preferences for sound, foods, scent, and the place of the study were focused as learner styles. Participants of this study were 129 freshmen at the English Department and the newly developed questionnaire (SILC: The Style Inventory for Learning Commons) for this study was employed. As a result, interesting interactions between the learner styles and the use of the LC was discerned, and it was also found that half of the participants positively recognized the LC in their college life.

1. はじめに

近年、大学生の学習時間が少ないことを問題とする議論が学内外で活発になされている。大学生の読書時間も危機的状況にあることが頻繁に報じられ

ている（例えば、朝日新聞、2018）。そのような中、同志社女子大学は「学修するコミュニティ」を提唱し（同志社女子大学、2016）、大学生が授業内・外で自律的に学ぶことができるよう支援する姿勢を明確に示している。教員についてはFD（Faculty Development）活動（講演会、学内研修会）を盛んにし、授業内に関してはアクティブ・ラーニングを推奨、また授業外学習時間を自宅以外でも確保するために、自律的学習施設であるラーニング・コモنز（Learning Commons、以下LC）を2017年9月に今出川キャンパスで開始させた¹。ラーニングコモنزは、大学と自宅の中間に位置づけられるものであり、図書館とは異なる飲食についての規制がなされている。大学生が音楽をイヤホンで聴き、飲食しながら課外学習する姿を目にすることが少なくないが、本研究では飲食物、音（音楽など）、匂い（コーヒーなど）、そして学習場所についての好み（学習スタイル）に焦点をあて、その傾向を明らかにするとともに、LCとの関連性を議論する。またその議論を通して、飲食に関するルールの妥当性についても検討する。

2. 研究の背景

2.1 自律学習の重要性

近年、自律学習（Self-Regulated Learning）はどの学問分野においても重要視されてきている。特に大学生に関しては自らが学ぶ主体であることは古来より必要不可欠とされてきた。英語学習に関しても自律学習について多くの議論がなされてきている（例えば、Oxford、2016）。それは英語運用能力の伸長には、授業内学習では限界があり、特にEFL（English as a Foreign Language）環境においてはこの傾向が顕著であるからである。目標言語のインプット・アウトプットが量的に不足している条件下では、グローバル・リンガフランカ（English as a global lingua franca, Galloway & Rose, 2015）としての必要最小限の英語コミュニケーション能力を身につけることすら困難である。現在のところ必要とされる学習時間について応

用言語学の合意はなされていないが、小学生から大学生に至るまで継続的に学んだとしても、日本の EFL 環境下では英語学習時間が不足していることは自明であり、授業外学習時間を確保することは喫緊の課題である。

授業外学習において重要となるのが学習者方略 (Learner Strategies、以下 LSs) である。なぜなら課外学習においては指導する教師は存在せず自らが自らを教える必要があるからであり、その際に用いられる方法、すなわち方略によって学習成果が左右されると考えられるからである。本論では LSs 自体でなく、その選択に影響を与える要因として学習者のスタイル (Learner Style) に注目する。次に方略とスタイルの関連性についてその理論的背景を概観する。

2. 2 スタイルと学習者方略の関連性

スタイルとは学習の好みであり、意識するにせよ意識しないにせよ誰もが持っているものである。外向性 (extroversion) ・内向性 (introversion) を例に考えると分かりやすいだろう。人は、エネルギーの方向に関して、大脳皮質の覚醒レベルがもともと低く外部からの刺激によってよりエネルギーを増幅し得る外向型と、覚醒レベルが高く個人内でエネルギーを充填できる内向型に分類することが出来る (Jung, 1923)。

一方、LSs に関しては “Language learning strategies are activities consciously chosen by learners for the purpose of regulating their own language learning” (Griffiths, 2013, p.15)、すなわち「学習者によって意識的に選択された方法、それにより学習の自己調整が可能となる」(翻訳、筆者)と定義される。例えば、語彙学習の LSs を例に考えると分かりやすい。日本人英語学習者はひたすら書く、読むまたは見るといった機械的暗記方略 (rote-memory strategies) を利用することが多いが (認知的方略)、友人と学習成果の確認をする方略 (情意・社会的方略) やコミュニケーションの場で実際に語彙を利用しながら記憶する方略 (コミュニケーション方略) な

ど他にも種々多様な方法が存在する（図1）。

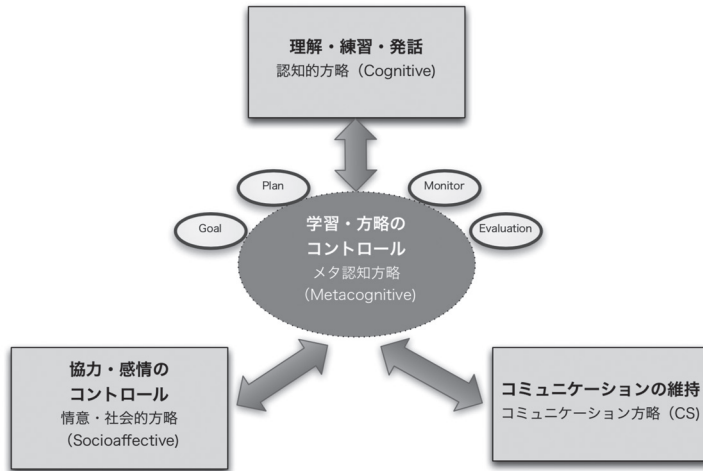


図1 学習者方略のシステム（若本、今井、大塚、杉森、2017, p.160）

ここで学習者のスタイルと方略がうまく適合する際、学習は継続的かつ効果的に展開する（Wakamoto, 2009）。すなわちどの学習者にも効き目を発揮する万能薬（panacea）のようなLSsがあるのではなく「ひとりひとりに適した Best-Fit Strategies (BFSs)」があるとする考え方である（若本, 2014）。テストの効果的な受け方（test-taking strategies）や実際に英語を聞いている際（real-time）のLSs使用のような制約がある場合（限られた時間、辞書など利用可能なリソースが制限される）とは異なり、日々の学習（real-life）における英語コミュニケーション能力伸長の練習方略はその微妙なバリエーションの違いを考慮すれば数限りなく存在する²。ここで重要なのは経験則に基づき、どのLSsが効果的かを論ずることではなく、スタ

イルとの関連性においてどのタイプの英語学習者にはどのLSsが向いているか議論することである。

成功した英語学習者 (Good Language Learners) の特徴としてあげられるのは、このようなスタイルと方略の適合性を (不適合性も含め) 自らが考えながら自己調整 (メタ認知) すること、すなわち英語学習自体について考えていることである (学習者方略のシステム、図1参照)。メタ認知とは自らの学習を俯瞰することであり「目標の設定・計画→学習→自己観察→修正」というPDCA (Plan-Do-Check-Action) のサイクルに従うと考えられている。その際、成功した英語学習者は自分の学習が最大の効果を上げるようメタ認知方略を使って自己調整をしている。これは教師から言われるままに何も特段考えることもなくただ「こなす学習」として宿題や課外学習に取り組む姿勢と対照的である。学習者は課題の意義を理解する事ができず、学習の過程で意欲が低下し英語学習に継続的に取り組む事が困難となる。

ただし、自分のスタイルに合うことばかりが重要なのではなく、敢えて自分のスタイルに合わない方略を意図的に選択する事は方略のレパートリーを広げることに繋がる。重要なのは、方略を自分で取捨選択する点であり、そのためにも自身の学習スタイルを認識することが不可欠となる。

2. 3 研究課題

ここまで自律学習が学習者とりわけ大学生に重要であることについて議論した。一方で大きな期待を背景に設立されたLCであるが、数ヶ月が経過した段階で大学生にどのように受け入れられているのか、受け入れられていないのか知ることが今後の活用・運用を検討する上でも重要となる。本研究では以下の2点の研究課題を設定する。

- (1) 大学生は授業外学習に関連してどのような学習スタイル(飲食・匂い・音声・場所)を持っているのだろうか? またその学習スタイルはLC

利用に関してどの程度関連しているのだろうか？

- (2) 新設された LC は学習スペースとして大学生にどの程度認知されているのだろうか？

3. 方法

3. 1 実施した調査の概要

本調査は、同志社女子大学今出川キャンパスに LC が新設されたことを契機に2017年秋、応用言語学・個人差研究グループ（3名）によって立ち上げられた大学生の学習スタイルと課外学習活動、LC 活用に関する研究プロジェクトの活動の一環として行われた*。

3. 2 調査質問紙の開発の手順

質問紙を作成するに当たり、概念妥当性 (Mackey & Gass, 2015) に配慮しながら、飲食、音、匂い、学習場所（他者の存在）を LC における自律学習・学習スタイルの構成概念として定義した。次に各構成概念（飲食、音、匂い、学習場所）に関する質問項目をできるだけ多く集め、研究グループによる慎重な討議を経て項目の取捨選択を行い、質問紙にまとめた。その際、実施可能性の観点から10分程度、30項目程度の質問紙の設計を行うことを前提にした。

パイロット調査は、2017年12月15日に LC 1 階館内で学習中の大学生1-4 年次生24名（表象文化学部、生活科学部学生）の協力を得て実施された。研究グループの内2名が調査員となり、調査について説明（主旨、方法、匿名性の確保）を行い、協力の得られた学生のみに質問紙を手渡した。記入を終了した学生よりただちに用紙を回収した。パイロットデータは即座に集計され (Microsoft Excel)、質問紙の信頼性分析 (alpha 法) を行った (SPSS Version 24.0)。その結果、信頼性の低下を招いている項目の削除、他の項目との入れ替えを行い、質問紙全体の信頼性の向上を図った。最終的に35項

目³からなる質問紙 (SILC : The Style Inventory for Learning Commons) を完成させた。

質問紙は Part A から E の 5 部から構成されている。Part A (飲食 : 5 問 × 2) は学習中の飲食が学習に与える影響を問う設問である。飲食が同時に行われることを考慮して、同一の質問項目の中で個別に問う形とした (資料参照)。Part B (音 : 4 問) では音楽だけでなく騒音の有無、Part C (匂い : 5 問) では実施が女子大学であることを考慮して、化粧のにおいを設問構成とした。Part D (場所 : 13 問) は学習に適切であると思われる場所であるが、LSs の観点から個人または協働学習に関するスタイルを含めた。併せて通学時の学習やその時間についての設問も含めた。Part E (LC : 3 問) はラーニングコモنزに対する認識を問う設問である。各設問の回答には 6 段階の間隔尺度 (Likert-scale) を利用した (「全然当てはまらない」、「当てはまらない」、「どちらかといえば当てはまらない」、「どちらかといえば当てはまる」、「当てはまる」、「よく当てはまる」)。集計、分析に当たっては、それぞれに対し 1-6 の得点化を行った。

3. 3 参加者

本研究の調査は 2018 年 1 月 17 日、英語英文学科開講科目 *Career Introduction I* 受講の 1 年次生、計 129 名の学生を対象に実施された (無記名)。本学は女子大学であるため、参加者はすべて女性である。調査に要した時間は約 10 分程度であった。質問紙実施に際しては、調査の目的・方法・匿名性の確保、調査への参加同意・不同意が参加者の自由意志に任されることが説明された。回収した調査用紙の内、同意が無いものや疑わしいもの (例えば、マークのしてないものや両方にマークしてあるもの) 及び白紙であったものを除外し計 109 名の調査用紙を有効回答として分析をおこなった (SPSS Version 24.0)。

4. 結果と考察

4. 1 質問紙の信頼性 (SILC)

まず質問紙 SILC の信頼性を示す (表 1)。

表 1 質問紙 SILC の信頼性 (Cronbach's α)⁴

セクション	項目数	α
Part A	10	.931
Part B	4	.727
Part C	5	.795
Part D	13	.441
Part E	2	.862
全体	34	.804

表 1 が示す通り、Part A ($\alpha = .931$) をはじめとした各セクションの信頼性は高い。信頼性が低い Part D ($\alpha = .441$) もパイロットスタディーでは十分な信頼性を示していた ($\alpha = .729$) ことから今後質問項目の更なる検討を通して一層の信頼性向上を図りたい。質問紙全体の信頼性は調査を実施するのに十分なレベルにあった ($\alpha = .804$)。

4. 2 記述統計

4. 2. 1 学習スタイル (食べもの・飲み物・音楽・匂い) の記述統計

次に参加者である大学生の学習スタイルを記述統計として示す (表 2)。

表2 参加者が認識する学習スタイル（傾向の明確な順序：平均値による）

	質問項目	Min	Max	M	SD
Q 1 b	飲み物	1	6	4.4	1.2
Q 1 a	食べもの	1	6	3.6	1.3
Q 8	音楽	1	6	3.2	1.6
Q14	匂い	1	5	1.7	0.9

Note: N=109.

表2が示す通り何かを飲みながら学習する者が最も多く(Q 1 b、M=4.4)、次いで食べもの(Q 1 a、M=3.6)、音楽を聞きながらする、(Q 8、M=3.2)の順であった。学習スタイルとして匂いを認識している大学生は少ない(Q14、M=1.7)。

次にそれぞれの学習スタイルを度数分布により示す(表3)。

表3 参加者が認識している明確な学習スタイル（度数分布による）

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q 1 b	飲み物	20.0	80.0
Q 1 a	食べもの	46.7	53.3
Q 8	音楽	57.9	42.1
Q14	匂い	95.3	4.7

Note: N=109；否定的な回答(1、2、3)、肯定的な回答(4、5、6)をそれぞれ合算し、全体に対する百分率(%)を産出。

学習スタイルについての認識の順位は変動しない(飲み物>食べもの>音楽>匂い)。ここで注目すべき点は、課外で学習する際に飲み物を好む学習者が全体の80%に達している点である。食べもの(53.3%)や音楽(42.1%)との相違は大きい。ただし、その絶対的な必要性(Q 5:「授業外で勉強す

る時、何かを食べ／飲みながらしないと勉強できない)については限定的である(表4)。これは参加者が大学生であるからで、調査対象を中高校生にまで広げると異なる結果が得られるかもしれない。

表4 飲食の課外学習での必要性(度数分布による)

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q 5 b	飲み物	70.9	28.1
Q 4 a	食べもの	81.9	18.1

Note: N=109; 否定的な回答(1、2、3)、肯定的な回答(4、5、6)をそれぞれ合算し、全体に対する百分率(%)を産出。

次に集中度についての分析結果を示す(表5)。

表5 集中度を高める学習スタイル(度数分布による)

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q 3 b	飲みながら	44.9	55.1
Q 6	多少うるさい	53.3	46.7
Q 9 *	音楽を聴きながら	56.1	43.9
Q 3 a	食べながら	68.2	31.8
Q 7	騒々しい	87.9	12.1
Q 11	香水をつける	87.9	12.1

Note: N=109; 否定的な回答(1、2、3)、肯定的な回答(4、5、6)をそれぞれ合算し、全体に対する百分率(%)を産出; * Q 9は関連する項目として集約した(Q 9. 音楽を聞くと、勉強する意欲が湧く)。

表5が示す通り、飲み物は学習集中度を高めるが(Q 3 b: 55.1%が集中度を高めると回答)、興味深いのは食べものよりも多少うるさい環境の方が

学習集中度を高める点である（Q 6：46.7%が集中度を高めると回答）。ただ、騒々しい状況になると逆に集中度を下げる（Q7：12.1%が肯定的な回答）。一方、音楽を聴くと学習意欲が湧くと回答している学習者は多い（Q9で肯定的に回答した者は43.9%）。また、匂いは自分の香水であっても集中度を高めることにはなっていない（Q11で肯定的に回答した者は12.1%）。化粧品には無香料のものもあるので一概に断定することはできないが、学習に関しては化粧の香料は集中度とトレードオフの関係にある可能性がある。化粧をしていることは集中力の低下につながる。

表6 匂いに関する質問項目（度数分布による）

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q12	集中度が変化する	68.2	31.8
Q10	学習がはかどる	90.7	9.3
Q13	匂いで決める	98.1	1.9

Note: N=109；否定的な回答（1、2、3）、肯定的な回答（4、5、6）をそれぞれ合算し、全体に対する百分率（%）を産出。

表6が示す通り、匂いがある方が学習のはかどる比率は低く（Q10で肯定的に回答した者は9.3%）、学習する場所を匂いで決めている学習者はほとんどいない（Q13で肯定的に回答した者は1.9%）。一方で匂いによって集中度が変化する学習者の比率は相対的に高い（Q12で肯定的に回答した者は31.8%）ことから、匂いについて参加者は「匂いがないこと、すなわち無臭」を好むスタイルにあると言えるだろう。

4. 2. 2 学習スタイル（学習場所）の記述統計

次に学習場所に関するスタイルの結果を示す。場所の選択では、表7が示す通り、学習者は授業外では自身が集中できる場所を第一に考えており（Q

23：94.4%)、Wi-Fi環境も重要な選択基準となっている（Q18：76.4%）。

表7 授業外学習場所の選択基準（度数分布による）

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q23	集中できる場所	5.6	94.4
Q18	Wi-Fi環境の良い場所	23.6	76.4
Q22	目的に応じて場所を選ぶ	24.3	75.7
Q21	大学生になってから変わった	61.7	38.3
Q24	一日の時間帯によって変える	63.2	36.8

Note: N=109；否定的な回答（1、2、3）、肯定的な回答（4、5、6）をそれぞれ合算し、全体に対する百分率（%）を産出。

また目的に応じて場所を選んでいるが（Q22：75.7%）、一日の時間帯によって場所を変える学習者は少なく（Q24：36.8%）、大学生になってから場所に関する学習スタイルは余り変化していない（Q21：38.3%）。では、実際に学習する場所はどうであろうか。

表8 授業外学習の場所（度数分布による）

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q15	一人になれる場所	32.7	67.3
Q17	ラーニングコモンズ	57.9	42.1
Q20	誰かに見られている	63.6	36.4
Q19	友達とする	64.5	35.5
Q16	図書館	69.2	30.8

Note: N=109；否定的な回答（1、2、3）、肯定的な回答（4、5、6）をそれぞれ合算し、全体に対する百分率（%）を産出。

表8が示す通り、友だちと一緒に学習するよりも（Q19：35.5%）、一人になれるところを選ぶ学習者が多い（Q15：67.3%）。また図書館よりも（Q16：30.8%）ラーニングコモンズを選択する学習者が多い（Q17：42.1%）ことが注目される。

また、授業外学習として通学時間帯が想定されるが、表9が示す通り本を取り出して勉強する者は少数である（Q25：16.8%）。携帯電話を触っている者は8割近くに及ぶが（Q27：76.6%）、音声機能を使ってリスニングの学習をする学習者は極めて少ないことがわかる（Q26：13.1%）。

表9 課外学習としての通学時間帯（度数分布による）

	質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q27	携帯電話を触っている	23.4	76.6
Q25	本を出して勉強	83.2	16.8
Q26	リスニングの勉強	86.9	13.1

Note: N=109；否定的な回答（1、2、3）、肯定的な回答（4、5、6）をそれぞれ合算し、全体に対する百分率（%）を産出。

この点からも通学時間は授業外学習の場とはなっておらず、自宅とともにLCがその学習の場としての可能性を多く持つことになる。

では実際のLCどのように使用されているか、LCの利用時間、利用快適さから分析する。

図2が示す通り0時間利用の学習者は多い(44.8%)。例えばLC内のカフェテリア利用や授業の合間に通るなど全くLCに足を踏み入れないとは限らないが、ここでは0時間利用を授業外学習に関してLCと無縁の学生と考えるのが妥当だろう。またこの項目の未回答者は11名に及んだ。この数値を含めるとLCを課外学習に全く使っていない学習者はこの図に示す比率よりもやや高くほぼ半数に呼ぶ(50.5%)。一方、授業外学習に取り組んでい

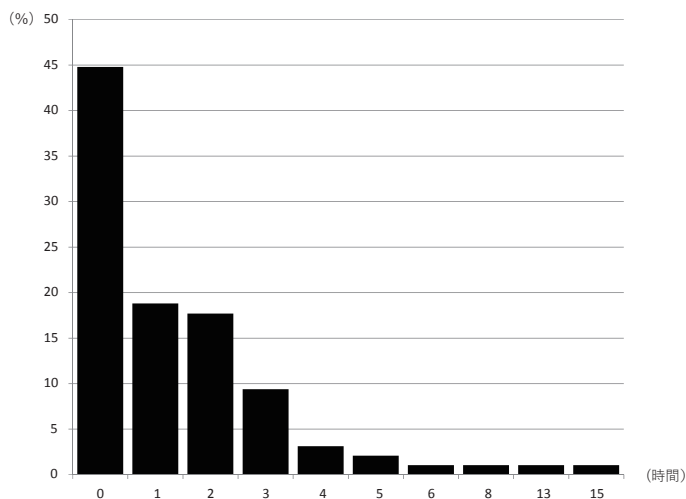


図2 LCの利用時間（週あたりの学習時間：Q30、N=96）

Note：0.5時間、1.5時間の回答が存在したがそれぞれ繰り上げてグラフを作成した。

る学習者に限ると1時間又は2時間使用という回答が最も多かった（それぞれ16.7%）。学習時間の平均は学生全体（N=96）で1.47時間（SD=2.40）、利用者限定すると（N=53）2.67時間（SD=2.69）であった。

最後にLC利用に関する認識についての結果を示す。ここではLCでの週あたり学習時間がゼロでないもの限定して分析をした（N=53、表10）。

表10 ラーニングコモンズの学習（度数分布による）

質問項目	否定的 (%)	肯定的 (%)
Q28 LCでの勉強は快適だ	9.4	90.6
Q29 LCにいると学習意欲が湧く	26.4	73.6

Note: N=53；否定的な回答（1、2、3）、肯定的な回答（4、5、6）をそれぞれ合算し、全体に対する百分率（%）を産出。

実際の利用者による LC の評価は高く、LC での学習が快適であると肯定的に回答したものは90%にのぼり (Q28)、70%の参加者が学習意欲の喚起につながると回答している (Q29)。

4. 3 相関関係

本研究のもう一つの目的は LC 利用と学習スタイルの関連性を検証することにあった。そのためにピアソンの積率相関 (Pearson product-moment correlation) を Q28 (LC の快適さ)、Q29 (LC での意欲喚起) を中心に算出した。表10と同様 LC の利用参加者に限定して分析を行った (N=53)。相関の有意性検定を行った結果を表11に示す。

表11 ラーニングコモンズの快適さ・意欲喚起と有意な相関のある項目

	質問項目	Q28	Q29
Q 8	音楽を聞きながら授業外学習	.286*	n.s.
Q14	集中する「匂い」を持っている	-.355**	n.s.
Q17	授業外で勉強する時は LC を選ぶ	.516**	.405**
Q30	LC での学習時間	n.s.	.315*

Note: N=53; Q28 (LC が快適); Q29 (LC が意欲喚起)

** $p < .01$; * $p < .05$

表11が示す通り授業外学習の場所として意図的に LC を選んでいる学習者は LC が快適であり ($r = .516$)、学習意欲をかき立てる ($r = .405$) と感じている。学習時間の長さや意欲喚起にも有意な相関がある ($r = .315$)⁵。一方音楽を聞きながら学習するスタイルの参加者や ($r = .286$)、匂いについてのニュートラルな (匂いがないこと) 学習スタイルの参加者ほど LC が快適であると感じている ($r = -.355$)。

4. 4 研究課題への回答

4. 4. 1 研究課題1への回答

研究課題(1) 大学生の授業外学習に関連する学習スタイル(飲食・匂い・音声・場所)は何か。またそのスタイルとLC利用に関連性は見られるか。

設定した4つの学習スタイルでは授業外学習の際には何かを飲みながら学習するスタイルの比率が最も高く、食事や音楽を聴きながらするスタイルは半数程度に留まっていた(表3)。一方飲み物が絶対に必要と答えた学習者は $\frac{1}{4}$ 程度あり、我慢することはできるものの飲み物があると集中度が高まると回答した学習者が $\frac{1}{2}$ にのぼった(表5)。興味深い点として多少うるさい環境下の方が集中度が高まると答えた学習者が飲み物と同程度の比率に上ったことである。従来から喫茶店で勉強することを好む、いわゆる「カフェ学習者」が多数存在することの証左となっているのかもしれない。では、スターバックスなどのカフェとLCの相違は何であろうか。学習者はWi-Fi環境の良い場所を選択基準にする傾向にあるが(表7)、その点ではカフェもLCも好条件という点では大差がない。使用料金の有無という相違はあるものの、最大の相違は、LCは大学の中でありながら心理的には外の状況を作り出している点かもしれない。カフェは大学の完全なる外であり、一旦学外へ外出してしまうと大学に戻ってくることはそうそう容易ではない。しかしLCは大学構内にいながらも、心理的に大学の外にでる効果を生んでいるのではないだろうか。通学時間が決して課外学習の時間となっていない現状では(表8)、このような大学の中でありながら「半」授業外・課外という心理的效果を生む環境は自律学習を促進するものなのかもしれない。

従来は図書館がその代替となっていたのであるが、飲み物を重要視する学習スタイルからはLCの方がより好ましいのであろう(表5)。ただ、授業外に学習をする場所としては「一人になれるところ」を選択する学習者が圧倒的に多い(67.3%) (表8)。この点においてもLCの方が有利である。同志社女子大学LCには多様な利用用途の部屋やブースが用意されており(例と

して、オープンスペースのテーブル席やガラス張りのグループスタディールーム)一人になりたいと思う場合にはその状態に近いタイプの部屋(キュービクルで囲まれた個別学習スペース)を選択することができる。ただし、インターネット喫茶にあるような完全なる個室ではなく全体がガラス張りになっているのでLCのどこにいても何らかの形で他者とつながっているという「半」個別化である。本研究の参加者は授業外学習を友人と行うとした者は殆ど程度であり一人で課外学習に取り組むスタイルを持つものが多い⁶。協働学習からLCの開放性に裏付けられた「半」個別化学習に至る柔軟な学習環境は、学習者の多様な学習スタイルに対応していると言えるだろう。

もう一点、興味深いのは匂いに関する学習スタイルである。本研究参加者は匂いが無い学習スタイルを持つものが圧倒的で(表6)、LCの快適さとも関連性が見られた(表11)。LCでは食べ物についての規制を細かくしており⁷、特に、匂いについての注意を明記している(例えば「匂いの強い食べ物はご遠慮ください」、同志社女子大学ホームページ、2018)。課外学習に際して、学習者が匂いに対して強い拒否反応を示していることを考え合わせるならこの詳細な対応は十分な合理性を持っているといえる。音と並んで匂いからその場にいるものは逃れることができない。煙草に限らず食べ物(特にカップラーメンなどのインスタント食品)の匂いは摂取する本人以外には学習を妨げるものとし映らないのであろう。

4. 4. 2 研究課題2への回答

(2) 新設のLCは学習スペースとして大学生にどの程度認知されているのか？

今回の調査から、利用状況においては約半数近くが何らかの形でLCを利用している姿が明確になった(図2)。

認知度は十分とは言えないものの調査参加者が1年次生であることを考えるとLCにとってその目的を達成する為の幸先の良い始まりだといえるのか

もしれない。また利用者の LC での平均学習時間が2.67時間（週あたり）であることは興味深い。日本の大学生は「約6割は授業時間を除くと、授業の準備や予習などの自発的な学習に1週間で1~5時間しかあてていない。約1割はゼロ」（安西、2012）と酷評されている。少なくとも LC がなければ課外学習に取り組まなかったであろう学習者にとって、ラーニングコモন্ズは福音となっているのではないだろうか。ただし、LC はあくまでも課外学習をサポートする補助的な役割にすぎないことは認識しておく必要がある。

文部科学省の指導のもと現在の日本の大学制度は硬直化しているきらいがある。欧米よりも1学期に学生が受講するコースの数も多く授業回数もはるかに多い（例えば、イギリス・オックスフォード大学は3学期制、各8回の授業回数。年間の授業回数で6回分少ない）。受講コース数が少なければそれだけそのコースに集中し課外で学ぶ時間も自然と増加する。逆に多ければ授業に参加することに大半の時間が割かれ（大学の高校化）、自律学習時間も減少する。大局的には授業のあり方の柔軟な設置方法を検討しながら（例えば、週2回の授業回数とすることで通年連続する授業を集中的に学習し半期で終了するようにするなど）、授業内容をより課外学習と組み合わせる形に発展させてゆくことが必要である。具体的には、授業内での学生の発言回数を増やす取り組みが効果的であろう。学生のプレゼンテーションの機会を増やすことは評価方法を含めこれまでの授業のあり方を変更する必要に迫られることになるが、課外学習時間を自律的に増やすのに効果がある（Fukuda & Yoshida, 2012）。今後、大学における授業がより課外学習の必要な内容に発展してゆくことで LC の認知度も利用度も高まるのではないだろうか。またそのような変革をサポートする形で LC が今後更にその設備やシステムを柔軟に更新してゆくことが望まれるであろう。

ラーニングコモন্ズは建物が立ち上がった時点で完成ではない。実際、ラーニングコモন্ズの創造的な利用については世界各国の大学で議論されている。学生自身をラーニングコモন্ズの共同設計者と捉える取り組み（Santos,

Ali, & Hill, 2016) やそのための具体的なシステムの導入（例、学生の声を反映させるブログの開設）、図書館との組織的連携（Murphy, 2017）などこれから LC が取り組むべき課題は多い。そのためにも本研究で行ったような、ユーザーである学生自身からの声を集める取り組み（例、利用者アンケートや SNS の利用）が今後一層望まれるであろう。

5. 結論と今後の方向性

2017年秋に LC が新設されたことを機に、研究プロジェクトとして質問紙を開発し調査研究に取り組んだ。その結果、以下8点が明らかになった。

- (1) ラーニングコモンズに関連して、飲み物（飲みながら）、食べ物（食べながら）、音楽（聞きながら）という学習スタイルが明らかになった。一方、匂いに関してはニュートラル（匂いがないこと）なスタイルが明らかになった。
- (2) 授業外学習場所の選択基準としては、集中できる場所、Wi-Fi 環境、一人になれる場所が上位を占めた。目的に応じた場所の選択がなされているが、一日の時間帯によって場所を変えることはなく、大学生になってから場所に関する学習スタイルは変化しないなど場所に対するスタイルは保守的な傾向にある。
- (3) 学習者の集中度を高めるのは飲み物、多少の喧騒、音楽であった。一定以上の騒々しさや香水は逆に集中度を削ぐ。
- (4) 匂いが出る食べ物を規制していることはラーニングコモンズ利用の快適さに繋がっていると考えられる。
- (5) 実際の授業外学習の場所としては、友だちと一緒に学習するよりも一人になれるところを、図書館よりもラーニングコモンズを選択する学習者が多い。
- (6) ラーニングコモンズでの学習時間は週あたり平均2.67時間であった。
- (7) ラーニング・コモンズで課外学習をしたいと思っている学習者にとつ

て学習は快適であり学習意欲の喚起につながっている。利用者の評価も高い。

(8) 通学時間帯は授業外学習としてほとんど利用されていない。

6. 研究の限界と結語

本研究のために質問紙 (SILC) を開発したが、今後 (1) LC での実際の学習内容を調査するもの (2) LC への要望を加える形での改訂が必要となるであろう。今回の研究では参加者が限定されており調査時期においても、テスト期間や卒業論文提出期間であったため、参加者の通常の LC での学習時間を調査することができなかつた可能性がある。将来的には、京田辺キャンパスの LC と併せて学部を超えた同志社女子大学全体での本格的なプロジェクトが必要となってくるであろう。今後、LC を有効に活用する上で本研究が活用されることを祈ってやまない。

注

- 1 京都市内の大学では同志社大学や京都産業大学が先行している。同志社女子大学の LC 開設に際しては同志社大学の LC や MIT (Massachusetts Institute for Technology) Media Lab を実際に視察し参考にされた。京田辺キャンパスでは半年遅れの2018年3月に図書館に併設する形で開設されている。
- 2 この点が逆に学習者方略は存在するのか (Do strategies exist?) という批判を受ける原因にもなっている (Tseng, Dörnyei, & Shumitt, 2006)。
- 3 質問項目は30項目であるが、Part A は5項目の質問に対して2通りの問いがあり学習時間を尋ねる質問を合わせると合計で35項目となる。
- 4 Part E の3項目のうち1項目は質的に異なるものである (学習時間を具体的に答える) ため信頼性分析からは除外している。
- 5 図2が示す通り学習時間は正規分布していないため解釈には注意が必要である。
- 6 ここには日本人特有の個別学習を好む学習スタイルが影響しているのかもしれない (Wakamoto, 2000)。
- 7 飲食が可能なエリアにおいても箸・フォーク・スプーン等を通常使わない食べ物や蓋つきの飲み物に限ると明記している (同志社女子大学ホームページ、ラーニ

ングコモنزエリア案内より：<http://www.dwc.doshisha.ac.jp/lc/area/index.html>）。

参考文献

- 朝日新聞 (2018, March 19). 「大学生の読書離れ、止められる？学内に気軽に読めるスペース」朝刊 p.28.
- 安西祐一郎 (2012, July 31). 「受け身改めぬと学生が損（耕論、変わるか大学生の学習時間）」朝日新聞朝刊 p.13.
- 同志社女子大学 (2016). 『Vision150：同志社女子大学将来構想2017～2026』. Retrieved May 21, 2018, from <https://www.dwc.doshisha.ac.jp/about/vision150/second.html#menu03>.
- 同志社女子大学 (2016). 「ラーニングコモنزエリア案内」 Retrieved June 1, 2018, from <http://www.dwc.doshisha.ac.jp/lc/area/index.html>
- Fukuda, S. T., & Yoshida, H. (2012). Time is of the essence: factors encouraging out-of-class study time. *ELT Journal*, 67 (1, January), 31-40.
- Galloway, N., & Rose, H. (2015). *Introducing Global Englishes*. Oxton: Routledge.
- Griffiths, C. (2013). *The strategy factor in successful language learning*. Bristol: Multilingual Matters.
- Jung, C. G. (1923). *Psychological Types* (Vol. Princeton University Press). Princeton, NJ.
- Mackey, A., & Gass, S. M. (2015). *Second language research: Methodology and design* (Second ed.). New York: Routledge.
- Murphy, J. A. F. (2017). A new student learning focus for the academic library: from geographical proximity of the learning commons to organizational proximity within the library. *Journal of Library Administration*, 57(7), 742-757.
- Oxford, R. L. (2016). *Teaching and researching language learning strategies: Self-Regulation in context* (Second Edition ed.). New York: Routledge.
- Santos, I. M., Ali, N., & Hill, A. (2016). Students as co-designers of a virtual learning commons: results of a collaborative action research study. *The Journal of Academic Librarianship*, 42, 8-14.
- Tseng, W. T., Dörnyei, Z., & Schmitt, N. (2006). A New approach to assessing strategic learning: the case of self-regulation in vocabulary

acquisition. *Applied Linguistics* 27(1), 78-102.

若本夏美・今井由美子・大塚朝美・杉森直樹. (2017) 『国際語としての英語／進化する英語科教育法』東京：松柏社.

若本夏美 (2014). 「Learner Strategies を研究する意義：個人差と教授法に架ける橋」山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会（編）、『第2言語習得研究と英語教育の実践研究』（pp.301-314）. 東京：開隆堂

Wakamoto, N. (2000). Language learning strategy and personality variables: Focusing on extroversion and introversion. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 38, 71-81.

Wakamoto, N. (2009). *Extroversion introversion in foreign language learning: interactions with learner strategy use*. Bern: Peter Lang.

*本研究は、同志社女子大学大学院文学研究科2017年秋学期開講科目『英語学習者論』における議論を発展させたものである。また本研究の質問紙調査にご協力頂いた2017年度『Career Introduction I』受講の英語英文学科1年次生129名の学生諸姉に感謝申し上げます。

資料**The Style Inventory for Learning Commons (SILC)**

(ラーニングコモنزと学習スタイルに関する質問紙)

研究プロジェクト LCS (Learning Commons and Styles) は、同志社女子大学今出川キャンパスに今秋、新しいラーニングコモنزが新設されたことを契機に授業外学習について調査を実施することを目的としています。率直にありのままをお答え下さい。大学の成績とは一切関係ありません。英語教育に関する発表のために、全体としてデータを使用することがありますが、結果に関しては統計処理を行いますので個人を特定するような扱いはしません。またこのデータは研究目的以外には使用しません。参加は個人の自由意志に任されます。最終ページに同意項目がありますので忘れないようにチェックして下さい。

研究プロジェクト

加藤 滯 (同志社女子大学大学院文学研究科英語英文学専攻M1 ; 代表)

連絡先 : ibk003@dwc.doshisha.ac.jp

千代間 泉 (同志社女子大学大学院文学研究科英語英文学専攻M1 ; 副代表)

若本 夏美 (同志社女子大学・英語英文学科教授)

回答方法

当てはまるところに、直接○をして下さい

注意

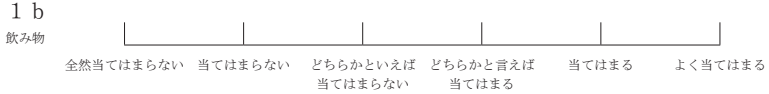
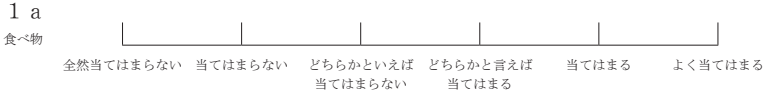
友だちと相談せずに、各自で回答してください。

回答する項目を飛ばさないように気をつけてください。

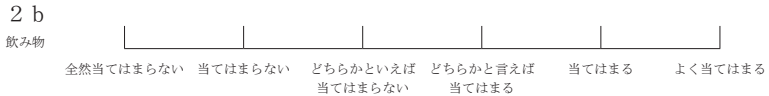
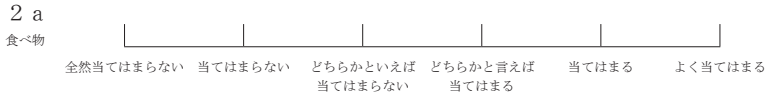
想定回答時間 : 7分~10分

Part A :

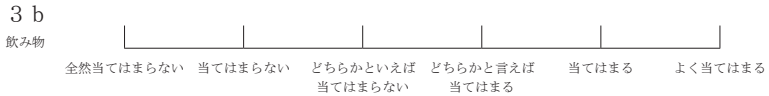
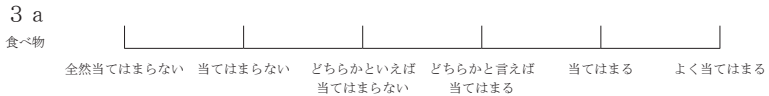
1. 授業外で勉強する時、何かを食べ／飲みながらする



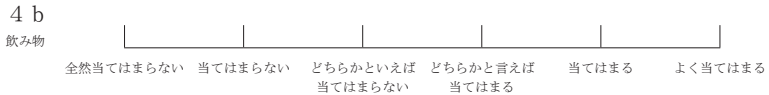
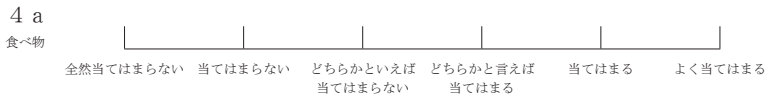
2. 授業外で勉強する時、何かを食べ／飲みながらすると効率上がる



3. 授業外で勉強する時、何かを食べ／飲みながらすると集中力が上がる



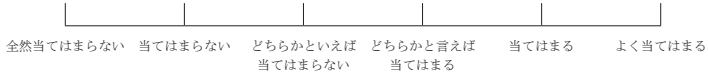
4. 授業外で勉強する時、何かを食べ／飲みながらすると暗記力が上がる



5. 授業外で勉強する時、何かを食べ／飲みながらしないと勉強できない

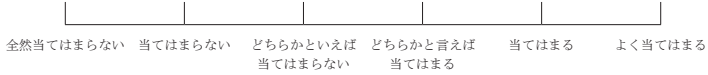
5 a

食べ物



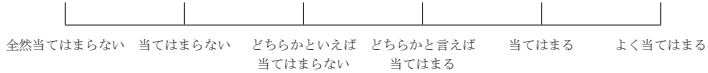
5 b

飲み物

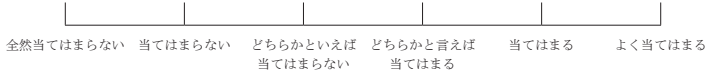


Part B :

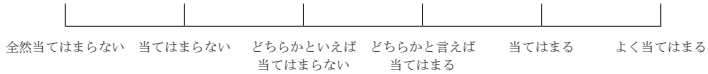
6. 授業外で勉強する時、多少うるさいと集中力が上がる



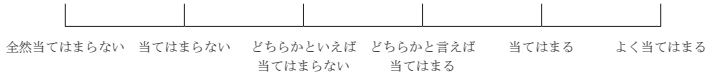
7. 授業外で勉強する時、騒々しいと集中力が上がる



8. 授業外で勉強する時、音楽を聞きながらする

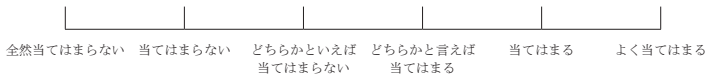


9. 音楽を聞くと、勉強する意欲が湧く

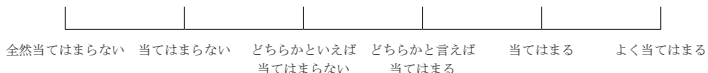


Part C :

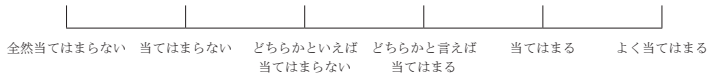
10. 授業外で勉強する時に、匂いのある場所の方がはかどる



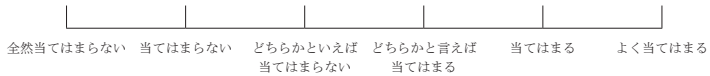
11. 香水をつけると、勉強の集中力が上がる



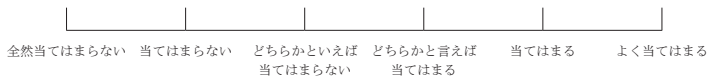
12. 匂いによって勉強の集中度合いが変化する



13. 授業外に勉強する場所は、匂いによって決めている

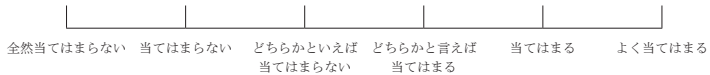


14. 私には勉強に集中するための「匂い」がある（例：コーヒーの匂いなど）

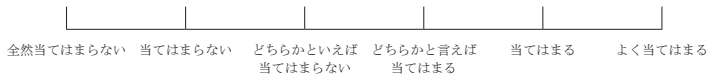


Part D :

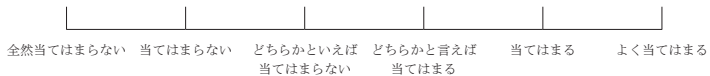
15. 授業外で勉強する時は一人になれる場所を選ぶ



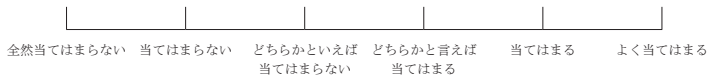
16. 授業外で勉強する時は図書館を選ぶ



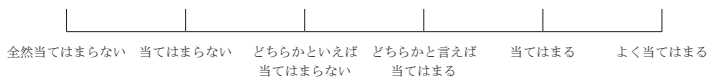
17. 授業外で勉強する時はラーニングコモন্ズを選ぶ



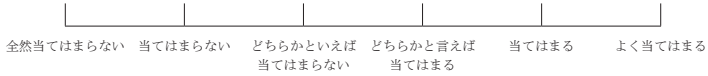
18. 授業外の勉強は Wi-Fi 環境の良い場所です



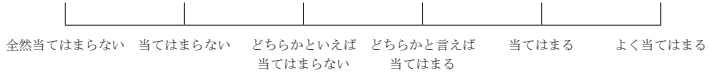
19. 授業外で勉強する時は友達とするのが好きだ



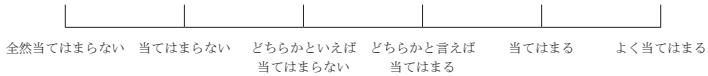
20. 勉強する時には誰かに見られていると集中力が高まる



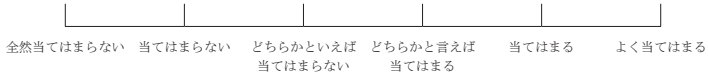
21. 授業外の勉強する場所は大学生になってから変わった



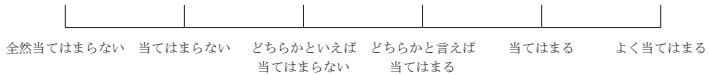
22. 授業外で勉強する時は目的に応じて場所を選ぶ



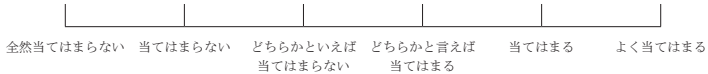
23. 授業外の勉強は集中できる場所です



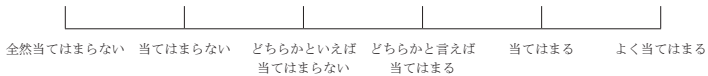
24. 授業外の勉強する場所は一日の時間帯によって変えている



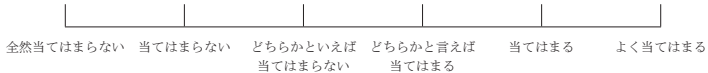
25. 通学時には本を出して勉強している



26. 通学時にはリスニングの勉強をしている



27. 通学時には携帯電話を触っている



Part E :

28. ラーニングコモنزでの勉強は快適だ

_____	_____	_____	_____	_____	_____
全然当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば 当てはまらない	どちらかと言えば 当てはまる	当てはまる	よく当てはまる

29. ラーニングコモنزにいると学習意欲が湧く

_____	_____	_____	_____	_____	_____
全然当てはまらない	当てはまらない	どちらかといえば 当てはまらない	どちらかと言えば 当てはまる	当てはまる	よく当てはまる

30. ラーニングコモنزでは週に合計 約_____時間 勉強する

(↑直接時間を書き入れて下さい)

学科_____学年_____ 海外留学(1年以上) なし・あり

(当てはまる方に○をつけて下さい)

同意項目 :

- このデータを研究用に利用することに同意する
- このデータを研究用に利用することに同意しない

ご協力ありがとうございました。